

日本社会心理学会会報

210号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2016年6月21日

日本社会心理学会第57回大会へのご案内(2)

稲増一憲・清水裕士(大会準備委員会)

日本社会心理学会第57回大会まで3か月を切り、いよいよ大会が近付いて参りました。今大会の発表申込み件数は、口頭発表105件、ポスター発表296件。大会の予約参加は483名、3年ぶりとなる懇親会の予約も255名と盛会が期待されております。なお、会員自主企画ワークショップは、以下の5件となっております。

- ・ 災害リスク研究の次を考える: 東日本大震災, 福島第一原発事故を踏まえて
- ・ 社会心理学における「産学連携活動の意義」を問い直す
- ・ 「隠す」心理を科学する—欺瞞的コミュニケーション研究の最前線—
- ・ 親密な関係の闇を捉える～DV, DaV, そしてストーキング～
- ・ 超高齢社会における社会心理学の役割(2)～高齢者を対象とする調査研究からの貢献～



さて、会員の研究発表が学会の中心にあることは言うまでもないのですが、本大会においては、大会準備委員による企画も充実をみせています。

大会1日目には、Daniël Lakens先生による“Towards a reliable and cumulative psychological science”と題したInvited Lectureが行われますが、同時時間帯に日本パーソナリティ心理学会との共催によるワークショップ「次世代学際研究への社会心理学の挑戦(Antonio Terracciano先生・権藤恭之先生・福田早苗先生・唐沢かおり先生・平井啓先生)」が開かれるというのも、どちらに参加しようか悩ましいところです。さらには、「社会心理学を、英語で教えてみませんか?(中島健一郎先生・一言英文先生・アダムスミス先生・大坪庸介先生)」も見逃せません。

そして、再びみなさまを悩ませる選択として、大会2日目には、日本選挙学会との共催による「政治態度や規範の探求をめぐる社会心理学と政治学の対論(河野勝先生・亀田達也先生・稲増一憲)」および日本動物心理学会との共催による「比較することの意味と意義—社会心理学と比較認知科学の新たな接点を求めて- Why we compare: Exploring new frontiers for social psychology and comparative cognitive science(菊水健史先生・友永雅己先生・大平英樹先生・増田貴彦先生・石井敬子先生)」という2つのシンポジウムが行われます。

このように、準備委員会の企画だけでも盛り沢山の本大会ですが、他にも大小さまざまな試みがちりばめられています。ただ、あくまで強調しておきたいのは、第57回大会は、「大掛かりな大会を実施しなければ」という意図のもとに行われる大会ではないということです。「研究も学会大会も誰かに命令されて行うものではない。どうせ大会を実施するのだったら、やりたいこと、面白いと思うことはすべてやっておこう」ということで企画を立てたところ、(主に三浦委員長の)やりたいことが多すぎて、気が付いたら盛りだくさんの大会になっていたということです。

その一例として「政治態度や規範の探求をめぐる社会心理学と政治学の対論」というシンポジウム開催をめぐる、大会準備委員会でのほのぼのとした日常の一コマについてご紹介したいと思います。

委員長「面倒なことは私(と秘書さん)がやるから、あんたたち(稲増・清水)は面白いことを考えなさい。大会まで、もう1年切ったんだよ！」

稲増「実は年報政治学という日本政治学会の論文誌で河野勝先生という政治学者の方が心理学をばっさり切っていて、とても面白かったです。それで、河野先生をお呼びして社会心理学者と対論していただけたら面白いかと思っています。」

委員長「ほう。それで、社会心理学者の側は誰にするの? 政治心理の研究をしているような人じゃ面白くないし、でも政治学者ともガチンコの議論ができる人じゃないと企画が成り立たないわけでしょ?」

稲増「理想をいえば、亀田達也先生にお願いしたいと思って…」

委員長「絶対に面白い。私それ見たい。そうしよう、というかそれ以外にない。引き受けてもらえるまで、あんた西宮に戻って来なくて良いから。」

かくして、委員長の特命を帯びた使者は関東へ向かい、河野先生・亀田先生のご快諾下さったおかげで、シンポジウムが開催できることと相成りました。紙幅の関係上、すべての企画について語るわけにはいきませんが、他の企画も同じような勢いとともに生まれ、「面白いことがしたい」という準備委員会の想いが溢れ出ているものであることをお伝えしておきたいと思っております。



また、本大会では3年ぶりに懇親会が行われます。前2回の大会で懇親会が行われなかったことで、社会心理学会の大会の「軽量化」が進められていたのに、と思われる会員の方もいらっしゃるかもしれません。そのなかで、我々大会準備委員が懇親会開催を行おうと思った理由の一つに、「学会期間中を通して、アカデミックな雰囲気に没入してもらいたい」という気持ちがあります。

本大会の懇親会では、アイデアインキュベーションセッションという、懇親会中でのインフォーマルな研究発表の場を設けています。発表者は会員の多くが参加するだろう懇親会の中で、自分の研究アイデアの相談を行えるのです。それに加え、発表者の「この人に話を聞いてもらいたい!」という希望を出してもらえれば、大会準備委員がその会員に事前に研究を聞きに行ってもらおうようお願いするということを考えています(必ず実現するとは限りませんが、尽力します)。これによって、学会が終わったあとに飲み食いしながらも研究について自由に語ってもらい、そして若手と大御所(とは限りませんが)が交流するという懇親会本来の機能も活用してもらいたいと思っています。

アイデアインキュベーションセッションの発表申し込みはまだ受付中です。6月30日までに(<http://goo.gl/forms/ZgyN0xHGP2Ji7YHn1>)から申し込みいただければと思います。ただし上限は20名で、先着順とさせていただきますので、発表を希望される方は早めにお申し込みください!

本来ならここで大学近くの観光案内などをできればよかったのですが、残念ながら関西学院の近くにはこれといってめばしい観光資源はありません。しかし、関西学院大学は全国でも「美しいキャンパス」として有名です。またキャンパス内部からは外の景色が見えないように工夫されており、テーマパークさながらの「学問への没入感」を演出してくれています。上述のように、大会準備委員企画やシンポジウム、そして魅力的なワークショップが多数企画されています。ぜひ、本学の美しいキャンパスをご覧になりながら、アカデミックな雰囲気に没入し、楽しんでいただけますと幸いです。

(いなます かずのり、しみず ひろし・関西学院大学)

- 日本社会心理学会第57回大会 Web サイト:<http://www.socialpsychology.jp/conf2016/>
- 大会準備委員会 Twitter:<https://twitter.com/jssp2016>

第3回春の方法論セミナー 参加記

2016年3月16日に、新規事業委員会企画による第3回春の方法論セミナー「統計的因果推論への招待」が上智大学四ツ谷キャンパスで開催されました。会報前号では速報をお知らせしましたが、今号では参加記をお届けします。次回以降も企画着々とのこと。どうぞ毎年春のお楽しみになさって下さい。

増田匡裕

「方法論セミナー」参加記の執筆を承った。このセミナーの肝煎りの新規事業委員の先生と偶々目が合ってしまった参加者の中で、且つ質疑応答まで残っていた人物という論理積集合に含まれていたためである。しかし、それだけは身も蓋もないので、もう少しまともな理由も推論してみる。まず、参加者を遠方から来た順番に並べると相当前の方に来る人物でもある。ネット配信も予定されているのだから、わざわざ遠方から出来たという感も否めないが、そういう出席者の存在は、企画の魅力度のインデックスに相応しい。だが、更にまともな理由を考えてみれば、現場密着型の研究ばかり、しかもケーススタディに近い研究法をとっている人間だからであろう。

上記のような推論をする人間、つまり“論理的な因果律”ではなく、ナラティブ的な解釈のための“意味構造としての因果関係”を記述する研究ばかりしている人間には、統計的因果推論なんぞ、まさに豚に真珠/猫に小判/馬の耳に念仏に他ならないと思われる向きもあるかも知れないが、然にらず、むしろ、「城壁の外の交絡の森」(会報第208号6ページの告知文より)で生き延びるための地図とコンパスなのである。

その「森」で出会う他分野のプラクティショナーたちが学問に求めるものは「介入の手がかり」である。私は久しく医療の関わる人たちの現場に足を運んでいるが、そこでは“国是の絶対神”としてのEBM(evidence-based medicine)に対して“生活に根ざした民間信仰”のNBM(narrative-based medicine)が対立しているかのように一見見受けられる構図がある。しかし、実際にはEBMがマニュアルでNBMがそれを「介入」に実践した例に過ぎなかったり、もしくはNBMが「ベスト・プラクティス」という“技”の提案に止まって「…が望まれる」という結びでEBMに“理論化”を委ねたりと、相互に“補完”し合っているのが現実である。「これをしたら上手いいったか」「これがないので困っている」という現状の記述ばかりで、「これをしなかったらどうなっていたらどうか」とか「これがなくても上手いいったのではないだろうか」という想像の余地がないのである。プラクティショナーが盛り上がっている傍らで、研究しかできない立場の者は「それって、『介入』なんですか…」と呟くのも憚られる始末である。

ところが、統計的因果推論は、仮想的な介入ができるのである。測定できなかったデータを想定した因果モデルを組み立てられるのである。本当の意味で現場への「介入」ができたという思いを抱いている研究者には是非お勧めの方法論である。などと、入門したばかりの人間のくせに、門前の小僧習わぬ経を読むというべき受け売りをしたくなる。学会の第3回方法論セミナーのページで閲覧可能な資料をご覧になれば、そういう

気分になることもお察し戴けるだろう。「記述」「説明」「診断」「予測」「介入」と、科学の目的はさまざまであるが、「介入」とは何かについてこんなふうに明快な議論をして戴ければ、自分の研究の“社会的な意義”についても分かりやすくなって、何だか嬉しい気分になってくる。

勿論、改めてはっとさせられて、頭を抱えることもある。我々がいつも何気なく口にする「データに語らせる」という台詞だが、我々は本当にデータを尊重しているのかという意味かと訊かれれば、それは疑わしい。データに助けをもらうという言葉や、本当に知りたい独立変数を操作しているのかという問い、更に測定可能な共変量の限界など、何をどこまで「データ」として切り取ってくるかという根源的な問題に突き当たる。どちらかといえば「記述」と「説明」が己の役割と自任している研究者の端くれとしては、実に耳が痛い話である。

方法論セミナーと聞くと、何か具体的なテクニックの話で、使わない自分には関係ないかと思われた方もいらっしゃるかも知れない。しかし、使わない人にとっても自分の方法論について実りのあるお話を拝聴できる素晴らしい機会である。新規事業委員会の先生方には衷心よりお礼申し上げます。
(ますだ まさひろ・高知大学)

- セミナー資料・動画はこちら:http://www.socialpsychology.jp/seminar/seminar_160316.html

広報委員責任編集コンテンツ(4)「もう一つの学会」

杉浦淳吉

今回、広報委員会企画として、「もう一つの学会」というテーマを設定しました。日本社会心理学会の会員の皆様は、他の学会にも掛け持ちしていることも多いと思います。最も多いのは日本心理学会や日本グループ・ダイナミクス学会などでしょうか。こうした関連学会以外にも、社会心理学は学際的な学問ですから、会員の方々は、様々な学問領域と連携し、また社会心理学の知見を生かす様々な応用的フィールドの学会にかかわっておられるでしょう。そうした「もう一つの学会」を会員でシェアできれば、新たな研究交流が生まれ、社会の要請に応えるステップになるのではと考えました。社会心理学に軸足を置く場合もあれば、そのもう一つの方に軸足を置く場合もあるでしょう。いずれにしても、その会員が行う研究が異分野の橋渡しをしていることになるのではないのでしょうか。「もっとこういう分野に社会心理学研究者に出てきてほしい」というような需要を発掘し、研究フィールドを開拓することは、社会心理学のプレゼンスを高めることにもつながると思います。

そこで、「あなたにとっての『もう一つの学会』をご紹介ください」との問いのもと、広報委員、社会心理学研究の最新号の著者の方々や、その知合いの方々に回答をお願いし、掛け持ちする学会について紹介してもらいました。

基本的には以下の問いを用意しましたが、他にアピールできる点などあれば、独自の視点からご紹介いただいています。

- (1) あなたが掛け持ちして所属する「ちょっと珍しいのでは?」「社会心理学会の会員にこういう研究分野を知ってほしい!」という学会はありますか?それを一つ紹介してください。
- (2) その学会の特徴を簡単にご紹介いただけませんか。構成メンバーや研究発表の特徴はいかがでしょうか。社会心理学会で研究発表を行うのと何が異なるのでしょうか。
- (3) その学会にはどのような経緯でかかわるようになりましたか?是非ご自身のご研究もあわせてご紹介いただければ幸いです。

結果として、9つの学会の紹介を紹介できることになりました。電子情報通信学会と日本選挙学会はお二人の方からご紹介いただきました。読者の皆さんは、他にも、ユニークな学会、会員の方々に知ってもらいたい学会がたくさんあることでしょう。今回の企画を手始めに、学会間の交流がより活性化し、日本社会心理学会が様々な学術分野をつなぐプラットフォームとして機能していくことを期待したいと思います。

(すぎうら じゅんきち・慶應義塾大学)

(1)電子情報通信学会 <https://www.ieice.org/jpn/>

(2)電子工学や情報工学に関して広く扱い、会員数約3万人の国内でも最大級の学会です。構成メンバーは大学や公的研究機関の研究者はもちろんのこと、企業に所属する研究者も多いです。学際領域を扱うグループもあり、心理学者の発表も有ります。最近是人に関する研究成果も発表される機会が増えてきていますが、社会心理学会での発表と比較すると、その研究成果で具体的に何の課題をどのように解決するのか、と言った応用に関する議論が多くなる傾向はあると思います。(あまりに研究会の数が多く、私ひとりで学会の一般論を語るのは難しいです…)

(3)私は、工学修士として企業の研究所に配属されました。当時は無線通信技術の研究をしており、周辺の研究者が皆電子情報通信学会に所属していたため、私も入りました。入社10年目に気持ちの良い通信サービスの実現というテーマに研究を変更した際に、右も左も分からない状態で心理学分野を広く研究対象の候補としたため、当時の共同研究者の専門分野に合わせて、社会心理学会、認知心理学会、認知科学会、日本心理学会に所属しました。

(回答者:新井田統・KDDI研究所)

(2)電子情報通信学会は、電話やインターネットなどの通信技術に関する学会であり、会員の多くは工学研究者です。主な研究分野は素材やエレクトロニクスなどのハードウェア、信号処理や計算科学などのソフトウェアといった工学的研究だと言えます。一方で、通信技術は人と人との情報伝達を目的とするものであり、人間に関する興味も持つ学会です。特に近年は、人のコミュニケーションの本質に迫ったり、コミュニケーションの質

を高める技術開発への興味や要請が高まっており、社会心理学(および心理学一般)の知見を流用した研究も増えていると見ています。社会心理学会との差異をあえて挙げるとするならば、社会心理学会が人の認知・行動の基礎的/理論的知見を追求する点に重きをおくのに対して、電子情報通信学会では応用的/問題解決的側面に重きをおいているように感じています。

(3)電子情報通信学会は3万人の会員を抱え、研究分野も多岐にわたります。そのため、学会組織の階層化が高度に発達しています。そのような下部組織のひとつに、ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(<http://www.ieice.org/~hcs>)があります。目標として「人間のコミュニケーションの特性を理解し、それを支援するための通信技術にかかわる基礎的な研究を発表する場の提供を目的とした研究会です。」が掲げられており、心理学研究と通信工学研究の学際的分野をカバーすることを目的としています。この研究会には古くから社会心理学会員が役員として参画しており、ある社会心理学会員の先生から誘われて自分も参加するようになりました。自身の研究の応用先を考えるのにあたって有益だと思ひますし、工学研究者に対しては社会心理学の知見やトレンドを情報提供することで重宝がって貰っているようです。

(回答者:松田昌史・NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

(1)日本選挙学会 <https://www.jaesnet.org/>

(2)選挙に関する学際的な学会です。社会心理学者の方も所属しておられます。選挙に関する理論的な研究、統計学を用いた実証研究など様々な研究が発表されます。また、マスコミ関係者のような実務家による現実の選挙に関するお話もあります。

(3)大学院生のころ、お世話になった研究会のみなさんが所属していたので入会しました。(回答者:今在慶一朗・北海道教育大学)

(2)選挙や政治に関連した研究者が集まる学会ですので、歴史や法律について研究している方もいらっしゃいますが、かなりの割合の方々为社会心理学会と同じように調査や実験データを用いた研究を行っているので、方法論や統計分析についての前提をある程度共有した上で議論が可能です。とくに、政治学において因果推論に関する議論が盛り上がっているため、実験研究への注目は非常に高まっています。

学会の形式としては、口頭発表は20分と長く、1つのセッションは口頭発表3本+指定討論2本で構成されている場合がほとんどです。公募もありますが、多くは企画委員の依頼で成り立っていますので、院生や若手研究者にとっては、口頭発表を行うようになるまでが1つのハードルになっています。一方で、登壇的な場として口頭発表とは独立した時間帯にポスターセッションが組まれています。1回の学会におけるポスター発表は15本程度ですので、多くの方にポスターを見てもらうことができます。

(3)指導教員の影響で政治の研究を行うようになる中で紹介され、学会に参加するようになりました。初めての学会発表は、政党スキーマに関する研究で、完全アウェーのつもりで参加したのですが、ポスターセッションのパネルの真裏が(政治学者の方による)エピソード記憶についての研究でしたので、記憶つながりということで一気に親近感が増したのを覚えています。また、社会心理学に関心を持つ政治学者の方、社会心理学の知見を用いた研究を行う政治学者の方が少なくないということは、選挙学会との関わりが増す中で、さらに感じていくことになりました。

(回答者:稲増一憲・関西学院大学)

(1)日本リメディアル教育学会 <http://www.jade-web.org/>

(2)「リメディアル教育」という名前になっていますが、リメディアル教育にかかわらず、大学教育にかかわる研究発表が網羅的に行われています。教育学プロパーの方もいらっしゃると思いますが、専門を別に持っている方が多いような気がします。いわゆる学際的な学会なので社会心理学者も特にデータ分析などについて貢献することができると思います。さまざまなバックグラウンドを持つ方が集まるのでおもしろいです。

(3)学内で応用言語学を専門とする教員らとeラーニングに関する共同研究を行っております。eラーニングを用いて簡単に教材が作れるように支援するツールを開発したり、eラーニングを用いて行った教育の成果を測定したりする研究です。これらの研究成果を発表する場として選んだのがこの学会です。(回答者:中西大輔・広島修道大学)

(1)環境情報科学センター(環境情報科学研究) <http://www.ceis.or.jp/>

(2)学会の主な構成メンバーは、環境問題に関する研究に従事している大学、国公立および民間の研究機関の研究者、国・自治体の行政担当者、公社・公団・民間企業などの技術者、教職員などです。日本社会心理学会と大きく異なる点は、学会発表と論文審査のシステムです。年に一回発行される論文集に論文を投稿し、通常の論文と同様に審査がなされます。この発表原稿は段組で文字が詰まった状態で仕上がり6ページなので、ほぼフルペーパーの分量です。実際、採択率は50%台、つまり40%以上はリジェクトされるというシビアな論文誌です。この査読に通って採択されてはじめて研究発表を行なうことができます。発表は並行セッションが少なく、きちんと準備された発表を聞けるので、学会発表の質も高く維持されています。他分野の研究について一定以上の質の発表をまとめて聞け、よい交流の場となっています。

(3)共同住宅での家庭ごみの不適正排出抑制のために、あいさつ活動や情報フィードバックの効果を検証した研究を投稿したのがきっかけでした(森・大沼, 2011)。心理学では統計的に有意であったかどうか重要な判定基準となるため、少ないサンプルで検定できないような研究は論文になりにくいですが、こちらの学会では、統計的な検定ができなくても、ユニークで実践的な取り組み(再現不可能な社会実験も重要視されます)や政策提言に有益かどうか審査基準になるため、こちらの学会に投稿しました。その取り組みが実践的か、現場にとってどのような意味があるのか、どのような政策提言に繋がるかについては、心理学では考えられないような厳しいコメントもあります。ところ変われば、論文審査の価値や基準が異なることも勉強になりました。最近では、ごみステーションの排出状況と地域のつながり、地域の物理的なつながりを検討した英語論文が掲載されました(Mori et al., 2016)。こちらの学会誌に投稿した理由は、上述の実践的な観点に加えて、環境問題について social capital 論やコミュニティ

論などの観点からアプローチをしている研究者らが当該学会にいることから、こちらの方で有益なコメントをいただけると判断したためです。環境情報科学は、環境問題に関する研究者が多く集まる学会であり、社会科学だけではなく、自然科学や行政の担当者が集まる学会であるため、さまざまな研究の読者に自分の研究をアピールする場だと思います。
(回答者: 森 康浩・北海道大学)

(1)日本シミュレーション&ゲーミング学会(JASAG) <http://jasag.org/>

(2)この学会は1989年に設立され、工学、経済学、経営学、法学、心理学など学際的なメンバーで構成されています。私は1991年から加入していますが、当初はファミコンやドリキヤス、プレステ、パソコンゲームなどの教育的活用や経営ゲーム、社会シミュレーションなどが中心でした。現在は、ゲームの開発、ゲームを使った研修や教育の研究が多くなっています。また、[国際シミュレーション&ゲーミング学会\(ISAGA\)](#)との連携も密で、昨2015年には京都の立命館大学で国際学会を開催しました。学会大会の特徴は、通常の学術セッションの他に、ゲームの実演や体験セッションを含むところです。特に国際学会で顕著ですが、ゲームのルールを理解し、戦略を考え(もちろん勝利をめざします)、ふりかえりのセッションでしゃべり倒すのが体験セッションの醍醐味です。

(3)社会心理学者としては、ゲームの含意や使用方法ももちろん考えたりしますので、集中力も必要な学会です。割り込み会話力と体力に自信のある社会心理学者の皆様には是非参加していただきたいなと愚考する次第です。
(回答者: 吉川肇子・慶應義塾大学)

(1)人工知能学会 <http://www.ai-gakkai.or.jp/>

(2)「人工知能」という名前はついていますが、最近のAIブームで創設以来おそらく何度目かの世間の注目を集めているとはいえ、情報学全般を扱う学会で、なおかつ情報学というのが非常に学際的かつ曖昧な領域なので、特徴をこれといって挙げるのが難しいです。研究発表も、自分の関係するセッション以外は何をやっているのかよく分からないくらい、心理学者から見ると多岐にわたる内容のものがあり、大規模です。研究発表に対するリアクションは、想像がつくと思いますが、社会心理学会なら発表が終わった途端に総ツコミを受けるだろう研究方法やデータ分析の細かいところはほぼスルーで、要するに何が分かったか、それが将来的な何らかの情報システムの実装にどう役に立ちそうか、というところに関心を持たれます。ただ、私にはそれがぴんと来ないものですから、発表賞をいただいたり論文執筆の招待をいただいたり、いつも割と受けはいいのですが、なんで受けてるのかよくわからないなあ、と思っています。学問の枠にとらわれない、遊び心が豊かな学会ということもかもしれません。

(3)もう20年ほど前になりますが、オンラインコミュニケーションの研究を始めた頃に知り合った情報学の先生に「誰か研究プロジェクトに来てくれる心理学のポスドクや院生はいないか」と言われて紹介したついでに自分もプロジェクトに関わるようになった、というのがきっかけです。

(回答者: 三浦麻子・関西学院大学)

(1)日本行動計量学会 <http://www.bsj.gr.jp/>

(2)名前の通り、行動を計量する理論や方法論、その実践的な研究について興味がある人が集まる学会です。もともとは木下富雄先生や飽戸弘先生など社会心理学者も多くいた学会ですが、最近ではほとんどいなくなりました。「統計学者の学会」と思われがちですが、そんなことはなくて、最近はマーケティングや社会学者など、計量データを使う多様な領域の人が集まる学際的な学会になりつつあります。また、誰もこの学会をメインにしていないという、「みんなのセカンド学会」という性格もあって、非常に入りやすい学会です。そういったいろんな領域の方々と意見を交換する機会もありますし、何より最新の統計手法についての話もいち早く聞けると、お得な学会です。

(3)私自身が統計に興味があるので、知り合いに誘われて参加しました。今まで発表したのは家族関係の分析で、テーマもデータも社会心理学的なものでした。
(回答者: 清水裕士・関西学院大学)

(1)日本生理人類学会 <http://jspa.net/>

(2)「生理人類学」は自然人類学(いわゆる理系の人類学)の中でも特にヒトの生理からアプローチする学問です。人類学といっても、人類の歴史や進化だけではなく、現代人の生活科学・人間工学に近い内容も広く扱っているようです。社会心理学だとたいい社会的要因や心理的要因(だけ)で現象を説明しようとするのが、生理人類学では生理要因(体内の物質の変化や遺伝要因など)だけで説明しようとするのが、一番新鮮でもあり、社会心理学にどっぷり浸かった者としては違和感を感じる場所でもあります。

(3)ポスドク時代に九大・芸術工学研究院・生理人類学講座で少しお世話になったのがきっかけです。ヒトの社会性に関しては、生理人類学でもホットピックなようで、社会心理学との関連で言うと、進化社会心理学や社会神経科学との親和性は高いと思います。一度、シンポジウムにもスピーカーとして呼んでいただき、シンポ論文として『日本生理人類学会誌』にこんな紹介記事も書いたことがあります。

社会心理学から集団を科学する：生理人類学との連携を目指して<特集>"集団"を科学する～若手研究者が考える未来～(70回大会シンポジウムの紹介))

(回答者: 縄田健悟・九州大学)

(1)廃棄物資源循環学会 <http://jsmcwm.or.jp/>

(2)廃棄物や資源循環をテーマとする学会で、工学・技術系が多く、他に経済や法律など社会科学系、環境学習や市民が主体となった集まりもあ

ります。企業の参加も多く、年次大会も平日に行われることが多い。

(3)大学院生の頃に参加した共同研究で、調査研究そのものは社会心理学を応用する環境(ごみ問題、リサイクルの促進)研究でしたが、工学部の方と共同で分析をすすめるうちに発表先の候補となり、会員になりました。社会心理学からのアプローチはオリジナリティが評価され、論文賞も受賞することができました。少しずつ自分自身のテーマもかわり発表も最近は無沙汰ですが、それでも未だに会員としてつながりをもっています。

(回答者: 杉浦淳吉・慶應義塾大学)

「社会心理学研究」採択論文の早期公開と編集委員会の開催方法の変更

沼崎誠(機関誌担当常任理事)

近年の、学術情報の誰にでも開かれた迅速な公表の流れを受けて、「社会心理学研究」におきましても、J-Stage を利用した、紙媒体での印刷前に採択論文を版組した形で Web 上に早期公開することになりました。

32 巻第 1 号発行時に、同号に掲載されている論文を J-Stage を用いて公開すると同時に、同号には掲載できなかった採択論文を、J-Stage の早期公開制度を利用して公開する予定となっています。その後は、2 ヶ月に 1 回、奇数月の下旬に採択論文を紙媒体印刷前に早期公開していきたいと考えています(準備の関係上今年度の 9 月は予定していません)。これに伴い、現在の 4 ヶ月に 1 回/年に 3 回開催されていた対面式の編集委員会を、2 ヶ月に 1 回/年に 6 回のメール会議による編集委員会へと変更して、編集委員会での採択決定を迅速にできるようなシステムに変更いたします。

これらの変更により、投稿から編集会議での採択決定までの時間を短縮するとともに、採択決定から公開までの時間を短縮することができ、これまで以上に会員皆さまの研究成果を、会員を含む広い社会に向けて、迅速にお届けすることができるようになって考えています。1 つ残念な情報として、31 巻の J-Stage での公開は、pdf ファイルだけではなく HTML 方式でも公開していましたが、上記制度の導入に伴う作業量の問題から、32 巻以降は pdf のみでの公開とさせていただきます。会員皆さまの研究を迅速に公表するための制約ということでご理解をいただければと思います。

今後も、審査や公開方法の効率化をおこない、投稿から公表までの時間短縮を目指していきたいと考えていますので、会員皆さまの積極的な投稿をお待ちしています。

- J-Stage 「社会心理学研究」URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jssp/-char/ja>

(ぬまざき まこと・首都大学東京)

会員異動 (2016 年 3 月 18 日~2016 年 6 月 17 日)

入会

《正会員》

・一般

赤川紗弥華(清和大学非常勤講師)、稲垣勝之(東京ガス株式会社都市生活研究所チームリーダー)、今瀧 夢(株式会社ワタナベエンターテインメント)、大久保慧悟(ディップ株式会社)、大戸朋子(KDDI 研究所研究員)、蕪木太加彦(新潟医療福祉カレッジ福祉心理科教員)、河合直樹(京都大学大学院工学研究科研究員)、小松恭子(KDDI 研究所知能メディアグループ)、佐々木秀綱(一橋大学商学研究科)、城間益里(筑波大学人間学群心理学類研究生)、須永直人(株式会社須永総合研究所)、高橋伸彰(関西学院大学文学部総合心理科学科契約助手)、中川秋美(学校法人昭和学院 昭和学院短期大学人間生活学科こども発達専攻教授)、中村文彦(玉川大学脳科学研究所嘱託研究員)、一言英文(京都大学こころの未来研究センター助教)、福井 斉(梅花女子大学心理こども学部心理学科講師)、藤田欣也(東京農工大学工学研究院先端情報科学部門教授)、松本 桂(東京都立光丘高等学校教務部主幹教諭)、三戸千穂(東京ガス株式会社リビングマーケティング部都市生活研究所統括研究員)、皆元 司(九州産業大学大学院国際文化研究科国際文化専攻臨床心理学研究分野大学院生)、村田由香(日本赤十字広島看護大学看護学部教授)、山口耕平(株式会社須永総合研究所)、山脇三千代、横光健吾(公益財団法人たばこ総合研究センター研究部研究員)、吉野ヒロ子(帝京大学文学部社会学科専任講師)

・大学院生

東ももこ(法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻大学院生)、新井裕子(学習院大学大学院人文科学研究科大学院生)、荒木貴仁(立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科大学院生)、井奥智大(大阪大学大学院人間科学研究科大学院生)、伊川美保(京都大学大学院 教育学研究科大学院生)、石井祐貴(学習院大学人文科学研究科心理学専攻大学院生)、石丸彩香(名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻大学院生)、石森真理(広島大学大学院総合科学研究科放射線災害から復興するフェニックスリーダー育成プログラム大学院生)、伊藤篤

希(京都大学大学院人間・環境学研究科大学院生), 伊藤幸子(日本大学大学院文学研究科大学院生), 今村夕貴(大阪大学大学院人間科学研究科大学院生), 上島淳史(東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学専門分野大学院生), 上野裕介(広島大学大学院総合科学研究科大学院生), 大森翔子(学習院大学大学院政治学研究科大学院生), 片上絵梨子(大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科大学院生), 片桐咲恵(山口大学大学院教育学研究科大学院生), 金子祥恵(九州大学大学院医学系学府精神病態医学専攻大学院生), 岸本瑞羽(駿河台大学大学院心理学研究科法心理学専攻大学院生), 喜多敏正(北海道大学大学院文学研究科大学院生), 紀日奈子(九州産業大学大学院国際文化研究科国際文化専攻臨床心理学分野大学院生/九州産業大学付属臨床心理センター相談員), 琴 允姫(九州大学大学院人間環境学府大学院生), 黒住 嶺(筑波大学人間総合科学研究科博士後期課程), 黒田起吏(東京大学大学院人文社会系研究科大学院生), 栗原風音(名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院生), 倪 少文(筑波大学システム情報工学研究科大学院生), 高 天琪(関西学院大学社会学研究科大学院生), 小林亮太(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻大学院生), 齋藤真由(東京大学大学院人文社会系研究科大学院生), 酒井智弘(筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻大学院生), 佐々木駿太(神戸大学大学院人文学研究科大学院生), 佐竹将希(同志社大学大学院心理学研究科大学院生), 蔣 従楠(大阪市立大学大学院文学研究科大学院生), 白井理沙子(関西学院大学大学院文学研究科総合心理科学専攻大学院生), 水師 裕(筑波大学大学院ビジネス科学研究科大学院生), 鈴木雄大(明治学院大学心理学研究科心理学コース大学院生), 滝口雄太(山梨大学大学院教育学研究科教育支援科学専攻大学院生), 谷口 晴(神戸大学大学院人文学研究科大学院生), 田村紋女(広島大学大学院総合科学研究科大学院生), 千葉柚子(一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻大学院生), 寺坂泰斗(神戸学院大学人間文化学研究科大学院生), 唐 晨(広島大学総合科学研究科社会心理学研究室大学院生), 冬賀純恵(筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻大学院生), 遠山素乃子(名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻心理学講座大学院生), 長峯聖人(筑波大学大学院人間総合科学研究科大学院生), 西端和志(京都大学大学院教育学研究科大学院生), 任 毅(広島大学大学院総合科学研究科大学院生), 沼田真美(筑波大学人間総合科学研究科大学院生), 野添健太(学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻大学院生), 橋本和奈実(法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻大学院生), 原田和幸(日本大学大学院文学研究科心理学専攻大学院生), 春田悠佳(上智大学総合人間科学研究科心理学専攻大学院生), 平野万由子(東京女子大学大学院人間科学研究科大学院生), ヒロザワ パウラム(名古屋大学大学院環境学研究科大学院生), 深瀬菜瑛子(東洋大学社会学部社会心理学研究科大学院生), 朴 香花(名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生), 松尾朗子(名古屋大学環境学研究科大学院生), 松木祐馬(早稲田大学文学研究科大学院生), 松崎さくら(大阪大学大学院人間科学研究科大学院生), 松本千香(広島大学総合科学研究科大学院生), 三木あかね(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻大学院生), 三木博文(大阪市立大学大学院文学研究科大学院生), 光藤優花(関西学院大学大学院文学研究科総合心理科学専攻大学院生), 本山夏希(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻大学院生), 森 真邑(首都大学東京大学院人文科学研究科大学院生), 八杉和人(関西学院大学社会学部社会心理学科大学院生), 山縣豊樹(北海道大学大学院文学研究科人間システム科学専攻大学院生), 山本佳祐(大阪市立大学大学院文学研究科大学院生), 山本翔子(北海道大学院文学研究科人文科学専攻行動システム科学専修大学院生), 呂 珂(東京都市大学大学院環境情報研究科大学院生), 渡邊 寛(筑波大学大学院人間総合科学研究科大学院生), GHERGHEL Claudia(静岡大学大学院人文社会科学研究科大学院生), Shreya Wagh(大東文化大学大学院アジア地域研究科大学院生) 雄太(山梨大学大学院教育学研究科教育支援科学専攻), 田中皓介(京都大学大学院工学研究科), 寺坂泰斗(神戸学院大学人間文化学研究科)

退会

鄭顯玉, 張筱, 安塚俊行, 山田弘司, 山根郁子, 兪叶韵

所属変更

寺井あすか(公立はこだて未来大学), 針原素子(東京大学大学院人文社会系研究科助教), 木村文香(東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科准教授), 福野光輝(東北学院大学教養学部), 時實達枝(Tokizane 総合事務所), 島井哲志(関西福祉科学大学心理科学部教授), 松田 憲(北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授), 真島理恵(北海道医療大学心理科学部), 池田 浩(九州大学大学院人間環境学研究院准教授), 若尾良徳(こども教育宝仙大学), 埴田健司(東京未来大学モチベーション行動科学部専任講師), 道家瑠見子(津田塾大学非常勤講師), 上原俊介(鈴鹿医療科学大学), 佐藤史緒(神奈川工科大学教職教育センター准教授), 村山 綾(近畿大学国際学部), 本田周二(大妻女子大学人間関係学部人間関係学科専任講師), 結城裕也(函館大谷短期大学コミュニティ総合学科助教), 佐野予理子(関東学院大学人間共生学部), 家島明彦(大阪大学 全学教育推進機構), 宮崎弦太(東京女子大学現代教養学部人間科学科特任講師), 高橋 均(広島大学大学院教育学研究科), 山本雄大(八戸学院大学特任研究員), 堀田結孝(帝京大学文学部心理学科講師), 小宮あすか(広島大学), 藤原勇(京都橘大学健康科学部助教), 小林麻衣(立正大学心理学部助教), 森田尚人(株式会社KCSプロダクト・ソリューション室), 川上直秋(島根大学助教), 浅野良輔(久留米大学文学部心理学科講師), 阿形亜子(奈良女子大学大学院人間文化研究科博士研究員), 古村健太郎(新潟大学教育・学生支援機構), 白岩祐子(東京大学文学部社会心理学研究室専任講師), 蔵永 瞳(滋賀大学教育学部), 友野聡子(宮城学院女子大学発達科学研究所客員研究員), 杉浦仁美(立命館大学スポーツ健康科学部講師), 藤井 勉(長崎大学大学教育イノベーションセンター助教), 木村 敦(日本大学危機管理学部危機管理学科准教授), 村田藍子(早稲田大学大学院基幹理工学研究科客員次席研究員), 池田琴恵(東京福祉大学短期大学部子ども学科講師), 塚本早織(日本学術振興会・京都大学), 山本真菜(大妻女子大学人間関係学部助手), 小幡直弘(北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科), 鈴木貴久(津田塾大学), 高本真寛(横浜国立大学教育人間科学部講師), 川人

潤子(比治山大学健康栄養学部管理栄養学科准教授), 石原留美(香川県立保健医療大学助産学専攻科講師), 大澤裕美佳(大阪市立大学都市文化研究センター研究員), 高田琢弘(筑波大学人間系博士特別研究員), 今井葉子(筑波大学大学院システム情報工学研究科博士後期課程), 郡司郁子(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構原子力人材育成センター), 寺口 司(大阪大学大学院人間科学研究科助教), 北梶陽子(高知工科大学助教(ポスドク研究員)), 遠藤(藤)寛子(立正大学心理学部特任講師), 中嶋励子(東京女子大学現代教養学部研究員), 佐藤 拓(いわき明星大学教養学部地域教養学科), 中野友香子(科学警察研究所交通科学第二研究室研究員), 日道俊之(神戸大学大学院人文学研究科), 玉井颯一(名古屋大学大学院教育発達科学研究科・日本学術振興会), 大澤英昭(日本原子力研究開発機構バックエンド研究開発部門幌延深地層研究センター副所長), 福島慎太郎(青山学院大学総合文化政策学部助教), 芳賀道匡(日本大学文理学部人文科学研究科研究員), 行平真也(大島商船高等専門学校商船学科助教), 岸 俊行(福井大学教育学部), 相田直樹(学校法人市川学園非常勤講師), 井出野尚(慶應義塾大学論理と感性のグローバル研究センター共同研究員), 手島啓文(東北大学大学院教育学研究科), 永井聖剛(立命館大学総合心理学部教授), 野上達也(一般財団法人日本防火・危機管理促進協会主任研究員), 上林憲司((株)大和総研), 北村伊都子(梅花女子大学食文化学部食文化学科助教), 小林麻衣子(明治大学危機管理研究センター研究推進員), 寶 雪(立命館大学総合心理学部准教授), 立花知香(安田女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科), 矢野 香(長崎大学キャリア支援センター), 野崎優樹(京都大学こころの未来研究センター研究員), 相川康弘(京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻)

『社会心理学研究』掲載予定論文

第32第2号(2016年8月早期公開, 11月刊行予定)

《原著》

横山智哉・稲葉哲郎「政治的会話の橋渡し効果:政治的会話が政治参加を促進するメカニズム」

岩谷舟真・村本由紀子・笠原伊織「評判予測と規範遵守行動の関係:関係流動性に注目して」

《資料》

三浦麻子・小林哲郎「オンライン調査における努力の最小限化(Satisfice)を検出する技法:大学生サンプルを用いた検討」

編集後記

蒸し暑い梅雨の季節ですが皆さんいかがお過ごしですか。編集子は最近自転車乗りにもちょっと目覚め、先日「しまなみ海道」走破などしてみました。予想どおり、大して感動しませんでした。単に個人目標が達成できるだけでは、つまらないものですね。さて、広報委員会では、会報刊行の他に、独自 Web サイトの運用やソーシャルメディアでの広報活動を展開しています。これまで Google サイトで運用してきた Web サイトを、大会開催の頃を目処に刷新する予定で作業中です。また、Twitter(@jssp_pr)のフォロワーは会員数を超え、2000 の大台が見えてきました。杉浦担当特集にあるように、学会や学問領域の枠を越えて社会心理学の研究成果を周知するために、これからも積極的に取り組んで参ります。(asarin)